様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：２４２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2017
課題番号：２５３７０８８９

研究課題名（和文）加耶の興亡と対外関係に関する考古学的研究

研究課題名（英文）The fate of Kaya and archaeological study about a foreign relation

研究代表者
定森　秀夫（Sadamori, Hideo）

滋賀県立大学・人間文化学部・教授

研究者番号：９０１４２６３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：　加耶は、高句麗・百済・新羅のように統一国家を形成することなく、小国家連合を維持しつつ新羅に征服されるまで存続した。その間、加耶諸国相互間および新羅・百済・倭・高句麗・中国南朝との対外関係の在り様、変容などから加耶領域の変動・消長などを考古資料から検討した。加耶は考古学的には金官加耶・大加耶・小加耶・阿羅加耶の四つからなり、5世紀以降は金官加耶を除く三つの加耶が存続する。大加耶と小加耶は密接な関係であったが、三つの加耶は相互に独立し、かつその独立性が非常に強かったため、6世紀中葉に新羅によって滅ぼされてしまったと考えられる。

研究成果の概要（英文）：Kaya continued until it was conquered by Shilla, maintaining small federal union, without forming a unified nation like Koguryo, Baekje and Shilla. The fluctuation which had that and Kaya territory from the state and change and the ups and downs which are between the Kaya various countries and a foreign relation with Shilla, Baekje, Wa, Koguryo and Chinese Southern Court in the time were considered from archaeology material.Kaya is from four of KumganGaya, DaeGaya SoGaya and AraGaya archaeologically, Three of Kaya except for KumganGaya continues after the 5th century. DaeGaya and SoGaya were a close relation, but three of Kaya can think it has been destroyed by Shilla in a middle lamella in the 6th century because it became independent mutually and it was very strong in the independence.

研究分野：考古学

キーワード：加耶　高句麗　新羅　百済　倭　中国南朝　対外関係　陶質土器

１．研究開始当初の背景

陶質土器の分析から、加耶は金官加耶・大加耶・小加耶・阿羅加耶の４国、すなわち考古学的には「四加耶」であったと、私のこれまでの研究から結論付けることができた。加耶は、高句麗・百済・新羅のように統一した古代国家を形成することなく、連盟体として存続してきた。それでは、なぜ統一国家を形成することができなかったのか。その解を追究する一方法として、文献史学的な検討を考慮しつつも、金官加耶・大加耶・小加耶・阿羅加耶の相互の対外関係、および加耶と高句麗・百済・新羅、そして中国南朝・倭との対外関係を考古学的に検討していく方法があるのではないだろうかと着想したことが本研究の背景となっている。

２．研究の目的

金官加耶・大加耶・小加耶・阿羅加耶の四つの加耶の興亡は、各加耶間相互の対外関係、高句麗・百済・新羅・中国南朝・倭との対外関係と密接に連関していると推測される。これらの対外関係に関する研究は文献史学ではすでに限界に達している。しかし、韓国での発掘調査の進展により、この対外関係を示す考古資料がかなり蓄積されてきているという状況が認められる。したがって、それらの対外関係を表徴する考古資料を検討することによって、加耶の実態とその興亡の歴史を考古学的に解明していくことを本研究の目的とする。

３．研究の方法

考古資料としての遺跡・遺構・遺物を検討する。遺跡・遺構に関しては、すでに発掘調査が終了していて、そのほとんどが破壊ないしは埋め戻されているが、可能な限り現地踏査を行う。遺物に関しては、地域色が顕著にあらわれる陶質土器を中心として、地域色が出てくる装身具・馬具・武器・武具などを検討対象とする。その地域の一般的な遺物の中に、異質な遺物が存在していれば、その異質な遺物がその地域との対外関係を如術に示していると解釈される。その異質な遺物の抽出と検討という研究方法によって、加耶諸国間および加耶と高句麗・百済・新羅・中国南朝・倭との対外関係の一端を解明する。

４．研究成果

１）加耶相互の対外関係：加耶は、小国家の連合体であるが、実際に加耶がいくつ存在していたのかは、文献史学・考古学の研究でも確定できていない。私は、時期的な消長はあるが、金官加耶・大加耶・小加耶・阿羅加耶の４加耶と考えている。金官加耶は３世紀後葉から５世紀初まで独自の加耶系陶質土器を有していたが、５世紀前葉から新羅系陶質土器を有するようになる。大加耶・小加耶・阿羅加耶は５世紀から６世紀中葉にかけて、それぞれ独自の陶質土器を有する。この四つの加耶では、他の加耶の陶質土器がほとんど出土していない。あえて言えば、小加耶では大加耶の陶質土器が散見される程度である。陶質土器から見ると、それぞれの加耶は非常に独自性か強かったと言うことができるかもしれない。その中で、特異な遺跡がいくつかあり、例えば洛東江の東側に位置する釜山九朗洞古墳群では、5 世紀代に金官加耶系・小加耶系・阿羅加耶系、新羅の慶州系・昌寧系の陶質土器が出土し、6 世紀代には新羅系陶質土器となる。大加耶系の陶質土器が出土していないことは、当時の加耶相互間の関係を示唆する可能性がある。

２）新羅との対外関係：新羅との対外関係で最も注目されるのは、玉田６号墳出土の山字形金銅冠である。山字形冠は新羅特有の冠であり、慶州のみで金冠が出土し、金銅冠・銀冠は慶州と新羅領域から出土するものである。その際、注意されるのが、『三国史記』記載の大加耶が「叛」し、新羅によって滅ぼされたという記事である。なぜ「叛」なのか。『三国史記』には、6 世紀前葉に大加耶と新羅の婚姻記事など、同盟関係を示す記録があり、玉田６号墳もその時期である。玉田６号墳出土山字形金銅冠は、文献で見られる大加耶と新羅との蜜月期を示す考古資料と考えることができよう。一方で、慶州から大加耶系の考古資料は現在のところ確認されていないことは、大加耶と新羅との対外関係の在り方を示唆するものと言えよう。大加耶では高霊池山洞 32 号墳から新羅系陶質土器が出土している。この考古資料と合致する記録は見られないが、5 世紀中葉にも新羅との対外関係が存在していたことを示すと考えてもよいだろう。

小加耶の内山里古墳群・松鶴里古墳群からは、小加耶特有の陶質土器とともに、6 世紀前半には、新羅系陶質土器・大加耶系陶質土器・倭系須恵器が出土している。このような様相をどう理解するのかが、小加耶の実態解明の一助になると思われる。おそらく、大加耶の海への出口的要素、そして新羅の西進地域的要素を持ちながら、小加耶の存続をもたらすバランス外交ではなかったのではなかろうか。

３）百済との対外関係：ソウル夢村土城・忠南天安などで、4 世紀代の古式陶質土器内陸様式が出土している。この様式は新羅の慶州地域にも分布するものであるが、加耶地域の大加耶あるいは阿羅加耶方面のものであれば、加耶と漢城百済との対外関係の資料として扱うことができる。もしそうであれば、大加耶領域であった玉田古墳群からのみ出土する特異なコップ形土器の祖型である中国南朝の陶磁器は、漢城百済を通じて入手、あるいは直接的な対外関係を通して入手した可能性も考えることができるだろう。また、ソウル風納土城から小加耶系陶質土器が出土している。この小加耶系陶質土器は 475 年漢城陥落以前であり、5 世紀前半から中葉に

かけて、小加耶と漢城百済との対外関係が成立していたことを示す考古資料であろう。その対外関係は、小加耶の地理的な位置から考えて、海上交通を用いたものであろう。一方で、加耶地域における百済系遺物はほとんど見られず、わずかに大加耶において見られるのみである。

４）倭との対外関係：倭系遺構・遺物が出土するのは主に金官加耶・大加耶・小加耶であり、阿羅加耶ではほとんど見られない。金官加耶では 4 世紀代の巴形銅器などが金海大成洞古墳群から出土していて、日本の古墳時代前期に相当する時代にヤマト政権と金官加耶の対外関係が確実に存在していたことを示している。大加耶では、高霊池山洞 44 号墳から剣菱形杏葉など倭系遺物がいくつか出土している。池山同 44 号墳は 5 世紀後葉に時期比定されるので、5 世紀後半に大加耶とヤマト政権との対外関係が確実に存在していたことを示している。大加耶地域では、倭系須恵器がいくつか出土していて、倭系の横穴式石室も検出されている。このことから、大加耶地域には倭人の存在が想定できるかもしれない。小加耶では固城松鶴洞 1 号墳で、倭系横穴式石室が確認されて、出土遺物の中にも倭系須恵器が散見される。小加耶でも倭人の存在を想定できると思われる。

一方、日本では多様な加耶系文物を認めることができる。それは、考古資料はもとより文献記録・神社・地名など探索し始めればその多さに驚くほどである。考古資料の中で陶質土器に絞ってみると、金官加耶系・大加耶系・小加耶系・阿羅加耶系の四つの陶質土器が日本に持ち込まれている。金官加耶系はわずかに福岡県で確認されているだけであるが、大加耶系・小加耶系・阿羅加耶系陶質土器は西日本から東日本にまで分布している。これらの四つの加耶系陶質土器の出土地とそれぞれの加耶との間に何らかの対外関係を想定することは可能である。その際には、時期的な差異、地域的な差異に注意を払うことによって、倭の中でもヤマト政権中枢との対外関係なのか、地方豪族との対外関係なのか、その対外関係の背景や意義が自ずと示されてくるものと思われる。

特に、本研究で注目したのは、日本から出土する大加耶系陶質土器と阿羅加耶系陶質土器の器種構成の違いである。特に壺類の占める割合が極端に異なるのである。阿羅加耶系陶質土器は 4 世紀代の古式陶質土器段階の両耳付短頸壺が対馬・山陰で出土しているが、5 世紀以降には壺類はほとんど見られず、供膳具の高杯や器台がほとんどである。それに対して、大加耶系陶質土器は 5 世紀中葉から 6 世紀中葉までのものが確認できるが、そのうちの三分の二が壺類なのである。このことは何を物語っているのか。仮説ではあるが、そのことの一つの解釈を考えみた。大加耶系陶質土器の壺類には、長頸壺・短頸壺などがあるが、内容物なしに日本に持ち込んでくることが考えられないとすれば、何らかの内容物を入れていた可能性が高い。それは交易品か贈答品かということもあるが、日本には存在しない内容物であることは想像できる。壺類の中に固体をいれることはまず考えられない。固体はそのままか梱包して移動させることが可能だからである。では、酒や薬など液体なのか。液体であれば、航海で揺れてこぼれだす可能性があり、よほど堅牢に蓋をしなければならない。液体の可能性も完全に排除はできないが、それがゲル状のものであれば、航海の揺れにも十分耐えることができる。そして、思いついたのがその内容物は「蜂蜜」ではないかという推定である。『日本書紀』皇極天皇２（643）年の記事に「この年百済の太子余豊が、蜜蜂の巣四枚をもって、三輪山に放ち飼いにしたが、うまく繁殖しなかった」(宇治谷孟『現代語訳日本書紀』講談社学術文庫 834 より)とある。6 世紀中葉に日本で養蜂が試みられたが失敗していることになる。蜂蜜は薬として全世界で用いられてきた。当時の朝鮮半島では養蜂がすでに行われていたことが、この『日本書紀』の記事で判明するが、その地域は百済である。加耶地域でも養蜂が行われていたのかは不明であるが、加耶地域で養蜂が行われていたと仮定すれば、大加耶系陶質土器の壺類には「蜂蜜」が容れられて薬として持ち込まれていたと考えることができよう。

５）高句麗との対外関係：高句麗地域において加耶系文物は確認することは現在もできなかった。おそらく、今後も発掘調査で確認する可能性は極めて低いであろう。一方、加耶地域では、高句麗系馬具と言われる馬冑・馬甲・蛇行状鉄器などがこれまで多数確認されていて、高句麗製あるいはその技術で在地製作されたものと考えられている。また、金海大成洞 29 号墳などから北方系文物である銅ふくが出土していて、これは高句麗を介して入手したものと考えるべきであろう。これらの高句麗系文物は、高句麗広開土王の 400 年の南下政策と密接な関連を想定することができる。加耶と高句麗との対外関係が強く見られるのはこの広開土王の時代であり、その前後は非常に希薄と言わざるをえない。

６）中国南朝との対外関係：中国の史書『南斉書』列伝に、479 年加羅国王の荷知が遣使してきたという記事がある。文献では中国南朝との対外関係を示す唯一の記事である。しかし、考古資料を見ていくと、中国南朝からの影響を受けたのではないかという遺物もあり、直接的・間接的を問わず何らかの対外関係は有していたと考えてもよいだろう。文献記録には残らない対外関係があったであろうことは、上述した玉田古墳群から出土する特異なコップ形土器の存在から想定できそうである。

７）加耶の興亡：加耶は、原三国時代の弁韓から統合された古代国家加耶へと発展することなく、金官加耶・大加耶・小加耶・阿羅

加耶として個別に独立小国家を形成し連盟体として存続した。陶質土器から見ると、共通する要素を持ちながらも明らかに異なる形態と器種構成を持つことから、独立性が極めて強かったことを感じ取ることができるが、自らの領域を拡大していくという理念は考古資料から感じ取ることはできなかった。その間に、特に5世紀代になると金官加耶は新羅勢力圏に組み込まれていき、実質的には大加耶・小加耶・阿羅加耶の三つの加耶が 6 世紀中葉まで並立することになる。

5 世紀からの加耶相互の関係を考えた場合。「大加耶」と「小加耶」の関係が重要になるような気がするのである。大加耶は海への出口を持たない。海に出るには百済を通じるか、小加耶を通じるかなど若干のルートしか持っていない。その場合、小加耶から大加耶系陶質土器が出土する意味は大きいと言わざるをえないであろう。小加耶は新羅とも対外関係を有していたが、加耶の中で「大」と「小」で表記されることにはやはり何らかの意味があると思われる。阿羅加耶に関しては、大加耶・小加耶との対外関係を示す考古資料が少なく、独立性がかなり強かったのではないかと考えておきたい。

独立性が強い加耶3国も６世紀の新羅の領土拡張政策の前におそらくなすすべもなく、婚姻関係を通した対外関係を通して存続を指向したのであろう。しかし、新羅にとって友好国である大加耶が何らかの理由で「叛」したため、新羅の攻撃によって滅亡してしまう。この大加耶滅亡前後に小加耶・阿羅加耶も滅亡するに至り、6 世紀中葉に加耶は新羅の領域となった。このことを示す考古学的現象が、これまでの大加耶系・小加耶系・阿羅加耶系陶質土器から新羅系陶質土器への転換である。

また、加耶の滅亡後に新羅による強制移住を示すと考えられる考古資料がある。太白山脈東側の東海岸沿いの東海チュアムドン古墳群から6世紀中葉の新羅系陶質土器とともに出土した大加耶系陶質土器がそれである。最近、同じ東海岸沿いの蔚珍徳川里古墳群から小加耶系陶質土器が出土していることが確認された。大加耶人だけでなく、小加耶人の中にも強制移住の対象となった集団がいたことになり、上述した大加耶と小加耶との関係の深さを示しているのではなかろうか

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1件）
定森秀夫、陶質土器からみた倭と阿羅加耶、地域と歴史、査読無、第 35 号、韓国釜慶歴史研究所、2014 年、257-296 頁
〔学会発表〕（計　　件）

〔図書〕（計　1件）
定森秀夫、六一書房、朝鮮三国時代陶質土器の研究、2015 年、200 頁
〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
定森秀夫、伊予の渡来 人―考古資料から類推する―、愛媛県埋蔵文化財センター、2015 年
定森秀夫、遊塚古墳出土品が語るもの～古代の美濃と朝鮮半島～、平成 25 年度大垣市文化財報告会第 2 部、大垣市教育委員会、2014 年
定森秀夫、４ ～６世紀の安羅国と倭の交流様相と性格―土器を中 心として―、シンポジウム紀ノ川北岸の古墳文化　― 初期須恵器・埴輪・陶棺からみた地域の歴史 ―、和歌山県文化財センター、2014 年

６．研究組織
(1)研究代表者
定森　秀夫（SADAMORI, Hideo）
滋賀県立大学・人間文化学部・教授
研究者番号：９０１４２６３７

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）